兵庫県社会福祉協議会

ひょうごの福祉

つながりで笑顔輝く　共生のまちづくり

CONTENTS

特集 地域の暮らしにこだわる ほっとかへんネット
～県内各地の実践から見えること～
笑顔輝く 共生のまちづくり
あなたのまちの福祉活動
キラリ★社会福祉法人
セルフヘルプグループのリアル
私の物語
県社協TOPICS

手軽に読める「ひょうごの福祉」WEBサイト

2023
9-10
No.849

10月1日より赤い羽根共同募金運動がスタートします
この機関紙は赤い羽根共同募金
配分金により発行しています。

令和5年9月15日発行　発行人：入江 武信　発行所：社会福祉法人 兵庫県社会福祉協議会

イメージキャラクター　作：尼子騒兵衛

特集

SPECIAL EDITION

地域の暮らしにこだわる ほっとかへんネット

～県内各地の実践から見えること～

「相談先が分からない」「経済的困窮のため今後の生活が心配」「子どもの発育に不安がある」「地域の過疎化が進んでいる」など地域生活課題はさまざまです。

この特集では、誰もが暮らしやすい地域づくりに向けて活動する、社会福祉法人連絡協議会（以下、「ほっとかへんネット」）の取り組みとその意義をお伝えします。

写真上から

“ほっとけない”課題を現場に出向いて解決（稲美町）

法人が連携して「介護職員初任者研修」を開催（相生市）

住民と福祉施設職員が協議して地域生活課題への対応を考える（小野市）

ロゴマーク「ほっとか騎士（ほっとかナイト）」

ほっとかへんネット
Hottokahen Net

「ほっとかへんネット」について

「ほっとかへんネット」とは、市区町域でさまざまな種別の社会福祉法人が連携するネットワークのことです。ほっとかへんネットの目的は大きく2つあります。ひとつは社会福祉法人が児童・保育・高齢・障害などの種別を超えた連携により、制度の狭間にある困りごとを含めた多様で複雑な地域生活課題を受け止め、支援することです。住民の困りごとを見つけるアンテナを張り巡らすためにも、市区町域でネットワークをつくっています。もうひとつの目的は、誰もが暮らしやすい地域づくりです。地域住民をはじめ多様な主体の力を生かして「こうありたい」と思う地域づくりを支援します。

この2つの目的でつくるネットワークのイメージが図1です。図のとおり、地域で困りごとを抱えた人を〝ほっとかず〟、相談支援や食料支援、子どもの学習支援、地域の居場所づくりなど、地域の特性・ニーズに応じた活動を社会福祉法人のネットワークにより実施しています。

ほっとかへんネット設置のきっかけは、兵庫県社会福祉法人経営者協議会(以下、「経営協」)が平成24年度に実施した社会福祉法人の地域貢献活動の実態調査と検討会議でした。検討の結果、地域における複合的課題や制度の狭間の課題に対しては、複数の法人が連携してネットワークで支える仕組みが必要だという結論に至り、市区町域で社会福祉法人の組織化を進めることになりました。

平成26年度からは、県社協と経営協が協働してほっとかへんネットの設立支援を続けてきました。8年が経過した今、ほっとかへんネットは県内に広がり、令和5年8月末現在で42市区町（86%）に設立されています。

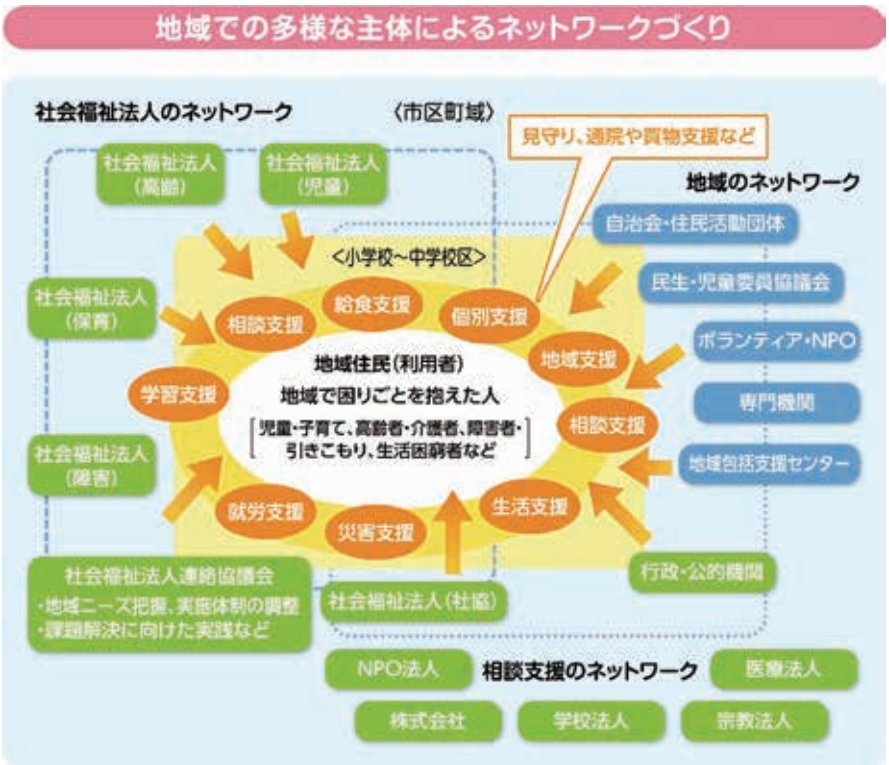
近年、ほっとかへんネットの活動はさらに充実しています。例えば、災害時の相互支援の取り組みが挙げられます。大規模災害が多発する中、被災地への福祉専門職派遣を行う「災害支援派遣チーム（DWAT）を兵庫県では、ほっとかへんネット（＝生活圏域）で整備し始めています。ほっとかへんネット単位の体制整備により、日頃から顔が見える関係性の中で、職員に自施設・園を含めた地域全体を守る意識が芽生えます。

この意識と相互支援の関係性、支援スキルを携えて、災害時に近隣住民への支援から他市町・他県への支援に拡がることを目指しています。

もうひとつ、近年充実してきた活動が生活困窮者への支援です。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で実施された特例貸付の借受世帯など生活困窮世帯への支援として、県内社協に配置された「ほっとかへんネットワーカー」との連携が始まりつつあります。

ここで、各ほっとかへんネットで取り組まれている活動事例を紹介します。

【図1】



ほっとかへんネットワーカーの活動は2023年7-8月号で紹介しています。

事例① 神戸市兵庫区

ほっとかへんネット兵庫は平成28年に設立。区内26法人が連携し活動しています。設立当初から取り組む生活環境改善事業のほか、法人職員が主体的に活動する「プロジェクト」型による事業運営が特徴です。

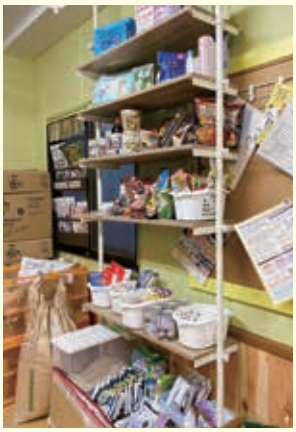
プロジェクトは「相談」と「災害支援」の大きく2つあります。各プロジェクトとも年間8回以上の会議を開催し、協議をベースに、福祉なんでも相談窓口「OIDEYO―H（おいでよひょうご）」や、本と食品等の物々交換窓口「CHANGE―H（チェンジひょうご）」、地域と共に行う防災・災害支援の「研修会・炊き出し合同訓練」などを企画。プロジェクトメンバーが主体となり、取り組んでいます。

「地域における公益的な取組の必要性は分かるが、現場は人材不足で余裕がない」という声も一部にはあります。しかし兵庫区では〝やらされ感〟や〝負担感〟といった義務感による活動から、主体的な活動へ好循環が生み出されています。そのための工夫のひとつが、職員による「手上げ方式」です。プロジェクトチームメンバーの選出は、平等性を意識して全法人に振り分けがちですが、職員の自発性を重視して「手上げ方式」にこだわっています。

ほっとかへんネット兵庫代表の金子良史氏は、「理事長などが社会福祉法人の使命や理念を職員に伝えることがポイント」と語ります。法人内にほっとかへんネットの意義を浸透させることは、職員を積極的に活動へ送り出す理解につながります。また、他の法人との交流は、あらためて自法人の理念や活動を見つめなおす機会になり、参加する職員のモチベーションの向上にもつながっています。

さらに、この活動は「ゆるく」「楽しい」つながりだと言います。〝あれはダメ〟と制限をかけられる活動ではなく、種別や世代を超えて、法人職員同士がチームで知恵を出し合い、一緒に〝ワクワク〟する取り組みを実践していることが主体的な活動の好循環につながっています。

食品・日用品の配布会のチラシ


本と食糧の“物々交換”により、支援する・されるの関係を超えたつながりを目指す（チェンジひょうご）

事例② 南あわじ市

ほっとかへんネット南あわじは、モデル地区として県内で最も早い平成26年に設立。市内11法人が参画して、会の方針を決める「推進会議」に加えて、実働体となる「実務担当者会議」で構成されています。モデル地区として模索しながら活動を続け、設立から3年後に動きだした実務担当者会議では「広報」「災害」「生活困窮者支援」「子ども支援」の4つのグループをつくり、活動の幅を広げています。

広報のグループでは、活動をわかりやすく伝えるためのグッズ作成や情報発信について話し合っています。災害のグループでは、市の防災訓練への参加や非常食の備蓄を行い、令和5年度は地域住民と連携した活動も検討しています。生活困窮者支援のグループでは、中間就労の窓口開設や、物品支援ネットワークの構築に向けて取り組んでいます。子ども支援のグループでは、当初は高齢者施設を活用した子ども食堂を開設しました。その後、コロナ禍により施設への住民の受け入れが難しくなったことから、地域の拠点に場所を変えて子どもへの学習支援を開始しています。夏休みや冬休みに、高校生ボランティアの協力を得て運営しました。

充実した活動が生まれてきた背景には、主体的に動く実務担当者会議の取り組みがあります。実務担当者会議で協議する際は難しく捉えるのではなく、職員が普段の暮らしの中で地域の課題と感じる項目を出し合い、その

課題を少しずつ解決していけるよう、活動内容を考えています。実務担当者が主体となり活動を決定できるため、「自分たちで考えたことを実現できた」と、達成感や楽しさを感じられています。

グループによる活動だけでなく、住民の困りごとや個別相談への対応にもネットワークが生きています。例えば、市社協が生活相談で関わる高齢女性への衣服のお裾分けを呼び掛けたところ、すぐにいくつかの施設から衣類が提供されました。

ほっとかへんネット南あわじ代表の岡本和浩氏は、「ほっとかへんネットの活動が住民の暮らしを守るという社会福祉法人の本業と結び付くことを目指したい」と話します。実務担当者が考えて活動する今のスタイルを継続しつつ、医療法人など他の事業体との連携や地域住民との協働を進めることが今後の展望です。

普段関わりが少ない高齢者施設の職員と地域の子どもの交流

誰もが暮らしやすいまちづくりを目指して

2つの活動事例からは以下の3つが共通項目として見えてきます。

①地域のニーズを出し合う「協議の場」

協議の場は、事例ではプロジェクトチームや実務担当者会議を指します。地域のニーズを実務担当者が率直に話し合う中で、互いの問題意識を共有し合うことが活動の原動力となります。こうした協議の場で出された地域ニーズを、福祉施設職員だけでなく地域住民・活動者や行政、学校、企業など、ニーズに応じて幅広い層が参画できる場で共有することも、地域づくりを進める上で大切です。

②主体的に楽しく活動

実務担当者の問題意識や考えに基づいて活動するからこそ、楽しみながら取り組めて、次の展開にもつながる好循環を生み出しています。このプロセスにより、協議から協働の楽しさが育まれ、職員の主体的な関わりにつながっています。

③組織のトップによる目的の浸透

ほっとかへんネットの目的は、社会福祉法人の本業である制度の狭間を含めた住民の困りごとを、〝ほっとかない〟で受け止めること、そして誰もが暮らしやすい地域づくりの一翼を担うことです。この目的を絶えず、組織のトップが法人内で職員に共有することで、活動の工夫や広がりが生まれています。

ほっとかへんネットは設立期を経て、いよいよ次は活動発展の時期へとステージが移り変わってきました。活動を更に発展していく先にあるのが、誰もが暮らしやすい地域づくりです。これは言い換えれば、誰もが自分らしさを発揮でき、排除・孤立することなく生きられる地域共生社会です。ほっとかへんネットが、地域共生社会の大きな推進力となるよう、法人間連携の輪をさらに多様な主体へと広げていくことが期待されます。

兵庫県社会福祉法人連絡協議会代表者等連絡会
澤村安由里代表より
（社会福祉法人山路福祉会 山路園理事・施設長）

兵庫県内の全ての市区町に「ほっとかへんネット」が設立されるのを目指し、設立を支援しています。設立された「ほっとかへんネット」がより有意義な活動ができるよう、研修会や情報交換会を開催していますが、活動の側面支援になるよう充実に努めていきます。「ほっとかへんネット」が地域包括ケアシステムの中の地域住民を支える、無くてはならないネットワークの一つに成長していけるかどうかは、これから10年の活動次第だと思います。一緒に頑張りましょう。

各市区町ほっとかへんネットの取り組みはこちらから

笑顔輝く

“笑顔”と“共生のまちづくり”につながる取り組みをレポート

共生のまちづくり

介護と仕事の両立ができる社会を目指し活動するNPO法人アイリス。団体名の“アイリス”とは、ギリシャ神話の虹の女神“天と地のメッセンジャー”であり、またアヤメ科の花の名前でもあります。その花言葉である「良い知らせ」を届けたいという思いが込められています。

「STOP!THE介護離職」介護者の想いに寄り添いサポートできる社会へ

介護と仕事の両立を目指す「アイリス」

家族を介護する方の身体的・精神的な負担は計り知れなく、やむを得ず介護離職をしてしまう人は年間約10万人にのぼります。介護のために今後の人生を変えざるを得ないということがないよう、介護者の想いに寄り添い、助け合える地域社会、企業の風土づくりを目指すのが、特定非営利活動法人アイリスです。

代表の合田真弓さんが認知症の母を介護した際に、周囲に介護のために離職する人が多くいる中、仕事を継続しながら母親を看取りました。介護を終えたときに「仕事を続けてよかった」と思ったことがアイリスを設立するきっかけとなりました。

介護者に寄り添った活動

働きながら介護をする人は孤立しがちで情報が得にくい状況です。このため、一番人の集まりやすい日曜日に「ケアラーズカフェ　アイリスのRIBBONcafe」を月1回開催しています。同じ境遇にある人同士が、情報交換をしたり、介護に対する思いや苦労を共有したりすることで、精神的な負担を減らす交流の場となっています。

また、令和4年1月には「訪問介護事業所ヘルパーステーションりぼん」を開設しました。やむを得ず介護離職をした人や介護中の人が働きやすいように、短時間勤務を可能にするなど工夫がなされています。

介護者のための
ケアラーズカフェの様子

気軽に書けるようデザインに
工夫を凝らしたなないろカード

介護について社会の意識を高めていきたい

他にも、伊丹市と協働してオリジナルのエンディングカード「想いを伝えるなないろカード」を作りました。従来のエンディングノートとは異なり、はがしたり書き直したりできる付箋を張り付けるカードなので、気軽に作れる仕組みがポイントです。自分自身が介護を必要とする場合に、どのような支援を受けたいかなど、介護について具体的に考え、意識を高めるきっかけにもなります。カードを書くことが難しい人には「カードの書き方講座」も開催。行政と連携して市民や企業にも案内しています。

今後は、活動の場を伊丹市以外にも広げたいと考え、SNSでの情報発信や講演の開催、広報にも力を入れています。アイリスでは、今後も介護に対する社会の意識を高めることで、介護者が「助けて」と言い出せる風土づくり、介護と仕事が両立できる風土づくりをすすめていきます。

取材を終えて

アイリスの活動を通じて、地域で集まり交流することの大切さを実感し、「将来は、介護者だけでなく子どもや障害などの区分なく、誰もが気軽に集まれる場を作りたい」と合田さんは嬉しそうに話されました。介護者に寄り添いながら、活動を広げていくアイリスに今後も注目です。

『特定非営利活動法人　アイリス』

場所：伊丹市広畑2丁目46－1ルミエール広畑307号
ＨＰ：https://iris-npo.jimdofree.com/

あなたのまちの福祉活動

共生のまちづくりに向けて市町社協が関わるさまざまな福祉活動を紹介します。

この活動を紹介してくれたのは

稲美町社会福祉協議会

☎079-492-8668

稲美町社協　検索

大人も子どもも歩いてふらっと寄れる場所

“ここち”は、地域の人が誰でも集まり食を通じて交流できる場をつくる住民グループです。誰かの「あったらいいな」の声を大切に、地元の農家や企業、ボランティアなど地域のさまざまな人たちと一緒に居場所をつくる取り組みを紹介します。

誰かの「あったらいいな。ないならやってみよう」から活動がはじまる

ここちの立ち上げのきっかけは、「給食のない日にお昼ごはんが食べられるところがあったらいいよね」という子育て中の母親同士の会話でした。「地域になければ自分たちでつくろう。楽しいことしたいね」と、自治会や子育て支援団体、企業、社協などを訪問し、活動に必要な場所や食材、資金を確保しました。令和2年3月、コロナ禍ではあったものの、地域の誰もが自由に出入りできる「開放の場」としてスタートしました。

現在、くにおか公会堂を主な拠点として月に1回程度、不定期に地域で食堂を開いています。当初は、昼間の時間帯に開催し約50名の参加がありました。その中で、「晩ご飯が食べられたらいいな」という親や子どもの声を聞き、月1回、夜にも活動日を設けました。開催の告知は主にInstagramで行い、おおよその開始時刻とその日のメニュー、どなたでもどうぞ、という内容が投稿されます。その投稿が、親や他の子育て支援団体による口コミを通じて拡散され、夜に開かれるときには、約200名の人が集います。

それぞれの方が思い思いの時間に来て交流し、心地よい雰囲気の中で町の人同士のつながりが広がっています。代表の市野加奈子さんは、「食を通じてたくさんの人が来てくれるようになり、中には不登校の子の親同士が、ここちでご飯を食べながら悩みや思いを分かち合っている場面もあります」と最近の様子と出会いの一コマを語ります。

ここちではみんなが主役に

ここちでは、当日の準備に明確な役割は決めていませんが、子どもから大人まで、そこにいる人が自然とお手伝いをします。近所の方が、手伝おうと準備の様子を見に来てくれることもあります。コロナ禍で活動が休止になった調理ボランティアの方も加わって力を発揮してくれるなど、さまざまな人が参加しています。

「みんなでできることを分担しながら力まずに取り組んでいます。ここちが誰でもふらっと立ち寄れる場所になって、さまざまな価値観との出会いの場になったらうれしいなと思っています」と市野さんは話してくれました。活動開始から3年を機に子どもたちから「ここちフェスティバルをやりたい」と声もあがっています。みんなの「やりたい」を大切にしていくここちの活動に今後も期待が寄せられます。

夏休みは大人も子どももみんなで流しそうめんを楽しみました

農家や企業、社協などから提供された地元の食材でつくられたここちのごはん

暮らしを支える地域公益活動を紹介します。

キラリ★社会福祉法人

洲本市社会福祉法人連絡協議会
（ほっとかへんネット洲本）

実務担当者会では、グループディスカッションで活発な協議が行われます

地域とのつながりを目指した福祉学習の取り組み

「洲本市社会福祉法人連絡協議会（以下、「ほっとかへんネット洲本」）」は、市内にある全ての社会福祉法人（11法人）が参画し、令和３年３月に設立されました。

今回は、将来の福祉を担う人材を育成する「福祉学習」の取り組みについて紹介します。

5年、10年後の将来を見据え、福祉人材を育てる

令和３年から活動を開始したほっとかへんネット洲本では、法人同士の顔の見える関係づくりを進めてきました。令和４年度からは、各施設の現場職員が集まる「実務担当者会」を設置し、地域生活課題の洗い出しを始めました。

会議では、「店が減少して、交通手段も少なくなってきている」「若者が島から出て行く」など、人口減少の影響による厳しい現状が共有されました。島内には大学や専門学校が少なく、高校卒業とともに島を出てしまうケースも多く見られます。地域生活を支える各法人にとっても、福祉施設で働く人材確保は重要な経営課題です。

そんな中、令和５年３月に実施した実務担当者会の事前アンケートで、「５年、10年後、将来の地域福祉を担う人材を確保するため、福祉の啓発活動や魅力を伝える取り組みが必要ではないか」との意見が寄せられました。

事務局を担う市社協では、長年小学校や中学校で、福祉について学ぶ授業を行っており、学校とのつながりがあります。このため、市社協がコーディネートをし、福祉施設の職員が専門性を生かして子どもたちに福祉の魅力を直接伝える、「福祉学習」に、ほっとかへんネットとして取り組むことにしました。

地域の小学校で「福祉学習」を実施

ほっとかへんネット洲本が行う第１回目の「福祉学習」は、小学４年生を対象に車いす体験を実施しました。

体験をした子どもたちからは、「車いすに乗る人の不安や怖さなど、気持ちが少し分かった」などの感想が寄せられました。

担当した職員は、「子どもたちとつながるきっかけとなった。今後も交流を深めていきたい」と話します。子どもたちに「福祉の魅力」を伝えることは、職員が自らの実践を振り返る貴重な機会にもなりました。

また、学校の近隣施設の職員が「福祉学習」を担当することで、学校の先生からも、「地域の施設の職員さんと知り合えてよかった」と身近に感じてもらうことができました。

今後は施設職員が小学校に出向くだけではなく、子どもたちが施設内のイベントに参加するなど、地域での双方向の交流に広げていくことが目標です。

その他、ほっとかへんネット洲本では、災害時に地域の安心拠点としての社会福祉施設の役割を発揮するために、ＤＷＡＴの登録も進めており、具体的な研修に取り組む予定です。

これからも地域とのつながりを大切にしながら活動をすすめていくほっとかへんネット洲本の取り組みに注目です。

小学4年生を対象に、車いす体験を実施。
身近な地域での交流の場にもなりました

ほっとかへんネット洲本
事務局：洲本市社会福祉協議会
ＴＥＬ：０７９９-２６-００２２

県内に拠点を置いて活動する自助グループを紹介します

セルフヘルプグループのリアル

つどいのはじまりは幼児から大人まで、みんなで集まってアイスブレイク

吃音親子のつどい「ほおーっと」

言葉の出だしに詰まったり、最初の音を繰り返したりする吃音（きつおん）に悩む人やその家族のための自助グループ神戸スタタリングプロジェクト。平成14年から、吃音親子のつどい「ほおーっと」がスタートしました。つどいの責任者である桑田省吾さんにお話を伺いました。

←吃音の不安や悩みについて、当事者、保護者、専門家の立場を超えて話し合える場があります

グループの概要

- 名　　称　吃音親子のつどい「ほおーっと」
- 活 動 日　毎月1回　日曜日午前中
- 活動場所　こうべ市民福祉交流センター
  プレラ西宮内男女共同参画センター
- 連 絡 先　bodyfull.kuwasho69@gmail.com

Q1. グループのたちあげのきっかけは

A. 言語障害や難聴のこどもの指導や相談を受ける仕事をしていましたが、皆に共通していたのは吃音を治したいというニーズでした。吃音は必ず治るものではありませんが、同じ悩みを持つ当事者や保護者同士の交流の場があれば、吃音を受けとめやすくなるのではないかという思いから、「ほおーっと」を立ち上げました。そこは、支援する側とされる側といった関係性ではなく、参加者が同じ土俵に立ち、自分の思いや情報を交換できる場となっています。

Q2. 現在はどのような活動に力を入れていますか

A. 「ほおーっと」では、月1回ミーティングを行い、吃音の不安や悩みについて話せる場を作っています。吃音の相談に来られても、そこには不登校やひきこもり、神経症や発達障害などの要素が含まれていることもあります。参加者の中には、学校の先生や言語聴覚士などの専門家もいるので、当事者や保護者からの不安や悩みに対し、専門家も含めてみんなで意見を出し合い、立場を越えて交流しています。

また、「合同レクリエーション」、「親子で手しごと」など、話さなくても参加ができる体験型のイベントも行ない、“ことば”だけではない豊かなコミュニケーションがあることを、身をもって体験してもらうことができます。

Q3. 社会に望むことや目標は

A. 私たちの周囲には「このままでは将来大変ですよ。訓練を受けた方がいいですよ」といった当事者や保護者が追い詰められるような情報があふれています。しかしながら、私たちは出会えた親子に「そのままの個性でいい」と伝えています。吃音について理解してもらうためにも、当事者同士という枠を超えて、さまざまな方と交流を行い、吃音についてもっと多くの方に知ってもらいたいと考えています。

そして、なによりも「ほおーっと」のような当事者が集える場を継続することが、当事者や家族が「そのままの個性でいい」と思えるような社会になるための一助になればと思います。

私の物語

このコーナーでは、地域福祉のキーパーソンや実践者・当事者らのエピソード・思いを紹介していきます。

市民活動と地域の可能性

ほうはし　さとし
法橋　聡　さん
注文をまちがえる喫茶店in丹波～カフェだんない～
企画実行委員会委員長
特定非営利活動法人 丹波ひとまち支援機構　理事

私のモットー

シンクグローバル・アクトローカル

Personal History

平成26年　勤務先を退職し、丹波市へIターン移住
平成31年　～カフェだんない～企画実行委員会を立ち上げ、第1回目を開催
令和2年　（特非）丹波ひとまち支援機構監事就任（現在理事）

地域に根差して

定年年齢での退職を機に、ゆとりある暮らしを求めて大阪から丹波にIターン移住しました。ですが、この地で市民活動等との関わりが増えるに連れ、予想外のドタバタの日々に突入。右往左往の活動とそこから見えた地域の可能性について触れたいと思います。

移住して数年、母が認知症歴20年以上だったこともあり、丹波でも、認知症の方が主人公として参加するカフェができないかと考えました。無謀な飛び込み提案から始めましたが、幸いにも丹波市社協さんや南部地域包括支援センターさんの全面支援を得て、平成31年から「注文をまちがえる喫茶店だんない」をスタートさせました。「だんない」とは丹波の方言で「気にしないで、大丈夫」といった意味です。現在、年7～8回の不定期開催ですが毎回50名程の来店客で大賑わい。令和5年7月で第17回目の開催を迎え、地域に根差した居場所になりつつあります。当日の運営支援やチラシ配布、茶菓子の提供など多くの方々のご協力で成り立っており、感謝しきりです。

新しい連携の模索

また、令和2年からは中間支援のNPO法人「丹波ひとまち支援機構」に関わっています。過疎や人口減少、担い手不足等が中山間地の共通課題ですが、これらに真正面から挑んでいる事務局の皆さんの頑張りはすごいですよ。ぜひ、地域自治を励ます多彩なメニューを展開する〝丹波〟の動きにご注目ください。非常勤のサポリ理事の私は、数ある事業の内、地元企業等の地域貢献を進める「たんばローカルグッドネットワークはまころ」を手伝っています。「はまころ」とは自転車の補助輪のことで「お互いを支え合い、動かしていく」と言う意味の愛称です。現在は参加企業と地域課題の勉強会を続けていますが、皆さん、事業の特色を活かして地域に貢献しようという高い志をお持ちです。「地域を良くしていく仲間」として、地域企業と市民活動の新しい連携が生まれようとしています。

地域の可能性

私は現役時代、勤務先の社会貢献部署を担当し「支援者の視点」で市民活動と接してきましたが、今はプレーヤーとして、よりダイレクトな手応えを感じています。この間、多くの人やコトに出会ってきましたが、地域では今、ニーズ発、自分発、または生きづらさ発の多彩な活動が広がりを見せています。ともすれば異質を排除しがちな日本社会ですが、これら多様な価値観を認め合う、しぶとい地域づくり、すなわち「地域の市民自治」を高めることがさまざまな課題を乗り越える原動力になるのだと思います。行政は勿論、専門職や企業、生産者、自治会、市民活動などが資源を持ち寄る「混ぜ込ぜ型」の連携が動き出せば、未来はきっと新しい姿を見せてくれるはずだと思います。

柔らかな空気が流れる中、多くの触れ合いが生まれます（カフェだんない）

だんないの取り組みは、2022年1・2月号「あなたのまちの社協活動」で紹介しています。

令和6年度兵庫県の社会福祉政策への提言

県社協では、県内の社協、社会福祉法人・施設、当事者団体、職能団体等の意見をもとに、国や県に対して社会福祉政策への提言活動を行っています。

今年度も、令和6年度に向けた提言活動として、20団体から寄せられた73の提言事項が提出されました。県民の生活や福祉サービスの提供などで生じているさまざまな課題に関する提言を取りまとめ、中でも、県内全域の共通課題であったり、県の政策への実現が強く求められるものを「重点提言」として3つに整理しています。

令和6年度
兵庫県の社会福祉政策への提言
重点提言

Ⅰ コロナ禍・物価高騰で直撃を受ける生活困窮世帯・福祉現場への支援
Ⅱ「ほっとかへんネット」の活動強化に向けた協働推進
Ⅲ パーソン・センタード（本人中心）の地域生活を支援する権利擁護施策の強化

1点目は、コロナ禍の影響で深刻な生活困窮から抜け出せない世帯への相談支援体制の強化をはじめ、福祉施設・団体の経営に大きな影響を及ぼす物価高騰や賃上げに連動した処遇改善および報酬改定について、そして、福祉・介護人材確保に向けた新たな取り組みの推進です。

また、2点目は、「ほっとかナイト認定制度」を通した地域公益活動のさらなる促進、社会福祉法人が連携し「地域における公益的な取組」を推進する「ほっとかへんネット」の活動強化に向けた支援について、3点目は、地域共生社会の実現に向けた権利擁護支援体制整備について計画の策定と「権利擁護サポーター（仮称）」の養成や、権利擁護支援の基盤となる日常生活自立支援事業の充実・強化について提言しています。

これらの提言については、兵庫県の社会福祉政策の一層の充実につながるよう、県知事をはじめ、県議会議長・副議長、県幹部職員などにも説明を行い、市町にも提言書を送付します。

8月25日に行われた説明会にて、
田口副委員長から生安県福祉部長への提言の手交

政策提言の重点提言は、県社協ホームページに掲載しています。
https://www.hyogo-welfor.jp/about/research.php

地域の福祉施設の見学や業務体験

福祉人材センターでは、福祉のしごと職場見学バスツアーを、10月中旬から実施します。

高齢者施設など福祉職場で働く職員から直接、仕事の魅力や働き方についてきくことができます。福祉の仕事に興味がある方は、ぜひご参加ください。

また、実際に福祉の職場で業務を体験できる「福祉体験学習事業」も実施しています。

各事業の実施日、体験可能な施設など詳細については、ホームページでご確認いただき、参加申込書にてお申し込みください。
https://hyogo-fukushijob.com/event

福祉人材センター YouTubeチャンネル

障害福祉施設で働くやりがいや魅力についてご紹介する動画が新しく完成しました。ぜひご覧ください。
https://www.youtube.com/channel/UCorAb7GEXW8C62kqB7d9bqA

ほっとかへんネットワーカーを対象に情報交換会の開催

令和5年8月2日、「社協における生活困窮者支援体制強化（ほっとかへんネットワーカー配置）事業」の情報交換会をオンラインで実施しました。

冒頭、県社協より特例貸付の償還・免除の状況や返済が難しい方への相談支援の対応状況に加え、本事業における県内社協の事業計画と現在の取り組み状況について説明しました。

続く事例報告では、赤穂市社協より特例貸付を利用した世帯への生活実態調査を踏まえた借受世帯との関わり方や市内の民間企業などと連携した食料支援の取り組み、三田市社協からは、「社協内連携・協働」による相談支援体制の強化や、ほっとかへんネットをはじめとした地域内の関係機関との連携による困窮者支援体制の強化を図ることでの地域の居場所への参加に向けた支援の取り組みなどについて報告されました。

報告の後、本事業を活用した取り組みについて、グループに分かれて意見交換、情報共有を行いました。

引き続き県社協においても全県的な事業展開を推進するため、各地の実践事例の収集・発信に取り組んでいきます。

寄付・寄贈について

県社協では、県民・企業・団体の皆さまから預かった寄付や寄贈を、地域福祉の向上に役立てています。

今号では、本年6月以降に温かな善意をお寄せいただいた企業・団体について紹介します。

■紀の庄木材株式会社様より、児童福祉の推進を目的として、兵庫善意銀行への寄付

■兵庫ニューメディア推進協議会様より、県社協への寄付

■ときの会有志様より、県社協への寄付

温かな善意に対し、ここに感謝申し上げます。

社会福祉分野での寄付・寄贈をお考えの方、社会貢献をお考えの企業の方は、兵庫県社協企画部（☎078-242-4633）までご連絡をお願いいたします。

寄付・寄贈については県社協ホームページでもご紹介しています。ぜひご覧ください。

https://www.hyogo-wel.or.jp/topics/donation.php

台風7号に関する県内の被災状況および対応について

全国各地に被害をもたらした台風7号により兵庫県では美方郡香美町に災害救助法が適用されました。香美町内、養父市内では床上浸水などの被害が発生したため、香美町社協では8月17日から災害ボランティアセンターを設置し、9月6日までに、延べ39件のニーズに対し、延べ124名のボランティアが活動しました。災害復旧ニーズや生活支援ニーズの把握を継続し、状況に応じて対応していく予定です。

養父市社協でも、ボランティアによる復旧支援を行いました。

介護・福祉施設に最適なホームページ総合パッケージ
介護サイトドットコム
プロが作ったホームページが
月々7,500円（税別）
※初期費用50,000円（税別）　※ドメイン利用料・取得費用別途
0120-113-756
【運営会社】株式会社メックコミュニケーションズ

ひょうごの福祉
●ひょうごの福祉 第849号 ●発行所／社会福祉法人 兵庫県社会福祉協議会 〒651-0062 神戸市中央区坂口通2丁目1番1号 TEL 078(242)4633 FAX 078(242)4153
令和5年9月15日発行 ●発行人 入江 武信 ●編集人 馬場 正一 ●URL www.hyogo-wel.or.jp/
UD FONT 見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。